幼稚園の源流を求める旅（1）

― 森有礼の第二次在米時代 ―

エリザベス・ピーボディーのボストン

国吉　栄

二〇〇五（平成17）年に関信三研究[注]に一区切りがついた私は、二〇〇六年と二〇〇八年、アメリカの幾つかの都市を訪ねた。日本に幼稚園が導入されるに至る過程は、決して単線で考えうるものではないが、私はその最も重要な動機は、幕末・明治初年の諸外国、特にアメリカにおける日本人たちの諸経験にあったと考えている。幕末・維新というわが国にとって特別な時代に、彼らは何を経験し、それがどのように幼稚園創設へとつながっていったのか。長く温めてきたこの課題に取りかかるに際し、具体的な一歩を、直接の舞台アメリカから始めたいと思ったのである。

当時、アメリカにいた日本人たちの中でも特に重要なのは、わが国最初の駐米外交官としてワシントンに在留していた森有礼の存在である。森有礼は、言うまでもなく近代学校制度の基礎を形作ったわが国の初代文部大臣であるが、彼と幼稚園との関係については、森研究においても、幼児教育史研究においても、ほとんど言及されてこなかった。

本連載では、二回のアメリカ旅行記を軸に、これまで描かれたことのない、アメリカで芽生えたわが国の幼稚園前史時代をラフスケッチすることとしたい。

Pinckney Street 十五番地

二〇〇六年、アメリカへの旅程を組むに際し、私は迷わず最初の滞在地にボストンを選んだ。ボストンはアメリカで最初の英語による幼稚園が開かれた場所である。また、その創設者エリザベス・ピーボディーの九十年にも及ぶ生涯のさまざまな足跡が残されている場所でもある。彼女の幼稚園があったのはPinckney Street十五番地。私は学生時代からこの番地だけは覚えていて、いつか行ってみたいと思っていた。

九月中旬のさわやかな日、私は思うようにはかどらない図書館仕事を切り上げて、Pinckney Streetがあるビーコン・ヒルに向かった。ボストン中心部には入植ピューリタンの共有地であった広い緑地、ボストン・コモンが広がっている。アメリカ最初の市民公園であるという。その北側に面しているのがビーコン・ヒルと呼ばれる丘陵で、開拓当初から開け始めた由緒ある住宅地である。丘陵の右手には、マサチューセッツ州議事堂が金色の丸屋根の塔をかかげてそびえ立ち、その正面には、向かって右に辞書を編纂したダニエル・ウエブスター、左にマサチューセッツ州の教育制度を作り上げたホーレス・マンの銅像がこちらを見下ろしている。

明治五年にボストンを訪れた岩倉使節団一行もここを散策したようで、久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』には、「波士敦（ボストン）ノ『ビーコン』街」と題する銅版画が収められている。当時馬車が走っていた車道に今は自動車や観光客用のバスが行き来しているものの、あたりの景色に変わりはないようである。

ビーコン・ヒルに一歩足を踏み入れると、レンガや石が敷かれた狭い歩道の両側に、石造りの重厚な建物が静かに並んでいた。ピーボディーにとってボストンはあこがれの街であった。十代のころ、ビーコン・ヒ

ルの邸宅で家庭教師をしていたこともある。彼女が住み込んでいたのはどの家だったのかと、通りの邸宅をついのぞきこんでしまう。

ボストン・コモンを背に、当時に思いをはせながらPinckney Streetを探して坂を上っていくと、坂を上りきった辺りにその標識が見えた。ふと、そこは今まで通ってきた所とは何か違うように感じた。間口の狭いペンキ塗りの木造の家が見えたからかもしれない。

幼稚園があった場所は、今はレンガ造りのアパートになっていた。というより、幾つかの番地を合わせてアパートが建てられ、十五番地はそのアパートの一部になっていた。何度あたりを歩き回っても番地の並び方から見ても、十五番地はさっき目についたあの木造の家と同じくらいの面積だったようである。

驚きであった。もちろん、文献から幼稚園の規模も知っていたし、普通の住宅で始められたであろうことも知っていた。けれども敷地自体もこんなに狭かったのだ。広々とした敷地にゆったりとした専用園舎が建設された日本の幼稚園の始まりの姿と比べると、両者の違いは歴然としていた。

Black Heritage Trail

数日後、調べもののためにBostonian Societyに出かけた。予約していた時間前に着いたので、階下のビジター・センターで本などを見ていると、一枚の観光地図が目に留まった。空港でもらった地図よりずっと見やすそうだ。見ると、地図には赤い線と青い線が引かれており、青い線はPinckney Streetを通ってビーコン・ヒルを巡っていた。いったい何だろうと目をこらしていると、ボランティアと思われる老年の紳士が話しかけてくれたので、この線は何かと尋ねてみた。

赤い線はFreedom Trailと名付けられたアメリカ独立戦争の史跡をたどるラインで、「ほら、道に赤いラインが引いてあるでしょう」と、戸口まで出て説明してくれた。このラインをたどっていけば、迷わず主な史跡を回れる仕組みになっているという。こんなことは

旅行案内の一冊でも読んでくれれば、質問するほどのことではなかったのだろう。では、ビーコン・ヒルを巡る青い線は？　それはBlack Heritage Trailであるという。黒人解放の史跡をたどる道である。しかし、こちらは晴れがましいFreedom Trailのように、道路に観光客用の線が引かれていたりはしない。

Pinckney Streetを走る青い線上の三角印を指して、彼は言った。「これは、ビーコン・ヒルに最初に建った黒人の家だよ」あの木造の家がそうだったのだ。そこからもう少し先に指をずらして彼は言った。「これはPhillips Schoolといってボストンで最初に黒人を統合した学校だよ」そうだったのか。ピーボディーの幼稚園は、黒人解放の史跡の間にあったのだ。私は二つの史跡の中間を指して言った。「ここにエリザベス・ピーボディーという人が、アメリカ最初の英語の幼稚園を開いたのはご存知ですか？」「いや、知らないな」「そうですか。この学校が統合されたのはいつですか？」「一八五五年」「幼稚園が開かれたのは一八六〇年です」「南北戦争が始まる前の年だね」「はい」。

ビーコン・ヒルは、十九世紀中葉まではボストン・コモンに面した南斜面が富裕層の邸宅、北斜面は黒人が居住する地区、とはっきり住み分けられており、北斜面はブラック・ビーコン・ヒルと呼ばれていたという。ピーボディーが幼稚園を開いたのは両者を分けていた境界線上であり、ビーコン・ヒルにとって、激動の、流動の時代であった。

Bostonian Societyからの帰り、私はまっすぐにビーコン・ヒルに向かった。ピーボディーの幼稚園とは何だったのだろうか。すぐに答えを出せない問いではあるが、再びPinckney Streetを歩き、Black Heritage Trailを巡って北の斜面を下りながら、彼女がやがて全力を傾注して、幼稚園を全米に設立するために旅立った出発点として、私なりに腑に落ちるものを感じた。

（彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師）

注　国吉栄著『関信三と近代日本の黎明　日本幼稚園史序説』新読書社　二〇〇五年